

# 地域の思いをつなぐ

地域の資源や人をつなぎあわせて形にする中間支援組織として昨年5月に発足したNPO法人吉備野工房ちみち。地域の思いをつなぐと、体験交流プログラムの実施や特産品のパッケージデザインの提案など、さまざまな活動に精力的に取り組んでいる。

## 古ツリーリズムシンポジウムから見えた自立した中間支援組織

「中間支援組織」。

あまり耳にしない言葉だ。この言葉の意味する考えは2月28日、サンロード吉備路で地域住民ら約150人が参加して開かれた「吉備野・古ツリーリズムシンポジウム」(NPO法人吉備野工房ちみち主催)で披露された。「地域資源をつなぎ合わせて形にしたり、市民と行政の間に立つ課題を解決したりする自立した組織」。基調講演とコーディネーターを担当したイデアパートナーズの代表取締役の井手修身さんは、先進事例を示しながらこう説いた。



みちくさ小道のプログラムの一つ「吉備野古道をご案内します」。こうもり塚付近の散策を楽しむ参加者



玉どうふのレシピコンクールの優秀レシピや玉どうふの雑学を掲載した『古の食卓 玉どうふ』。市内で玉どうふを食べれる飲食店も紹介されている

尻野)、池田根つこの会代表の本行光子さん(見延)、ちみち代表の加藤せい子さん(奥坂)の4人のパネリストが、ちみちの活動を絡めながら中間支援によるまちづくりの可能性について意見交換した。

みちくさ小道の座禅体験やボサノパソコンサークルで宝福寺を会場として提供した小鍛冶さんは、「これからも意表をつく企画を」と。所属団体で取り扱う福神漬のパッケージデザインをちみちと考えた本行さんは、「上の世代から若い世代への伝承をする体験交流プログラムや、農家の体験をする事業を考へては」と提案した。竹田副市長は、「元氣、パワーのある人が、地域を引っ張っていくことが、地域には必要」と。加藤さんは、「すてきな人を発掘し、主役にし、発信していきたい」と、今後のちみちの活動を見据えた。会場

### パッケージデザイン提案

昨年12月、ちみちの主催で開かれた「活かして・使えるパッケージ」講演会後、参加した生産者から希望のあった特産品6点のパッケージデザインを研究した。講演会で講師を務めた碓孝洋さん(写真左端)と生産者、「ちみち」の3者が4回集まり、意見交換をしながらデザインを詰めた。生産者の思いやこだわりをデザインの前面に出したり、シンプルなものにしたりしながら最終案を模索したことは、生産者の意識改革のきっかけづくりにもつながった。



ちみちは中間支援組織として、総社の活性化に向けたさまざまな事業に取り組んでいる。昨秋に15の体験交流プログラムにより展開した「みちくさ小道」や、特産品のパッケージデザインの提案、玉どうふのレシピコンクールなどがそれだ。総社にある資源を発掘し、つなぎ合わせ、

参加する人にも、それを提供する人にも喜ばれる企画を提供するちみち。コミュニティビジネスとも呼ばれる活動だ。シンポジウムのテーマは、「古ツリーリズムの可能性について(地域を耕す方法)」。竹田正彦総社市副市長、宝福寺副住職の小鍛冶一圭さん(井

からも「みちくさ小道に参加して、地元を見直すよい機会になった」との声もあった。

地域が元気になるためには、「市民が誇れるブランド作りが大切」と、井手さん。中間支援組織の役割は、「市民が大事にしていることを問いつけること」だと続けた。

本行さんも参加したパッケージデザインの提案も、コミュニティビジネスの一つ。福神漬のほか、モモのびん詰めや味噌、日本酒、饅頭について昨年12月以降、生産者の商品にかける思いやこだわりを聞きながらデザインを詰めた。内容量や商品名、商品の特徴を示すことなどを主眼に、消費者の目線だけでなく、販売

店舗の視点でもデザインの方向性を研究した。まとまった最終案を2月、生産者に提案した。

総社の文化や人、歴史をもとにし、地域のよさと、ちょっとした経済活動が結びつけていく中間支援。市民が活躍し楽しめるこの仕掛け作りをまとめていくことが、ちみちの存在を大きくする。

今、「内閣府地方の元氣再生事業」を受け、しっかりとした足がかりを作ろうとしているちみち。パッケージデザインの提案の協力者で観光プランナーの碓孝洋さんは、「この地域に一石を投じてくれたらと思う。早く成功事例ができるとうい」と、この活動へメールを送った。

## コミュニティビジネスの一例がパッケージデザインの提案

大正時代ごろまでこの地域にあった酒の都を復活させた「ちみち」。パッケージデザインの提案では、従来のラベルではなく、リボンのように斬新なラベルが提案された



問い合わせ 吉備野工房ちみち

(☎080-5231-6092)